

## 濱田滋郎 ● Jiro Hamada

**推薦** 1993年、来日したスメンジャンカ女史（元シヨパン音楽院長）から才能を認められ、ポーランドに留学した平澤真希は、かの地で16年を過ごし、その間、演奏ぶりは玄人筋から、また一般愛好家から、きわめて高い評価を受けたという。

これまで私はこの人の演奏を聴いたことがなかったから、おそらくこれが最初のCDだと思うが、ここに聴くのは、もはや完全に自分のスタイルを作り上げた名手の演奏にほかならない、と判断できる。《夜想曲》3曲（「遺作」嬰ハ短調、作品9-2、27-2）と、《バラード》全4曲を選び、1、2、4曲目に《夜想曲》を、3、5、6、7曲目に《バラード》を置いていて一見無頓着に見えるが、これは作曲年代順に楽曲を並べただけのことである。演奏ぶりは「歌わせかた」に独特な気分の「乗り」があり、潤いをおびたタッチには、どこか現代離れのした雰囲気がある。と言っても、大時代的なピアノニズムを追っているのでもなく、必要とあらば鍵盤をつんざくように激しい切り口も見せる。たとえば《バラード》第2番の、プレスト・コン・フオコに入るあたり。また歌の部分では、フレージズの変わり目に従って微妙に音色を変え、《バラード》らしい「物語性」を生み出すのも聴きもの。総じてこの人は、つねに自分の歌、自分の響きをもってシヨパンの「真実」を聴き伝えていようとする貴重なピアニストに属している。「自分の響き」は、末尾に添えられた自作の小品にも明らかだ。

## 歌崎和彦 ● Takahiko Utsaki

**【録音評】**多少近いが響きをゆたかに個々の音とタッチもなかなか明快に捉えている。ただ、それが演奏によるのか録音によるのかはわからないが高域にごくわずかだが強調感があるのは少し気になった。SACDも2chのみだがCD層ほど音に硬質な印象がないし、残響も含めて響きがよりのびやかになるなどバランスがよい。個々の音とタッチも細部がより明快になり、こまやかな表現の機微が素直に伝わる。なかでも《バラード》は最強音でも響きが頭打ちにならないし、こまやかな表現も不足なく伝えてくれるなど演奏の細部が生き。(91/92)



## ■平澤真希 / オマージュ・ア・シヨパン

①シヨパン：夜想曲第20番②同：同第2番  
③同：バラード第1番④同：夜想曲第8番  
⑤同：バラード第2番⑥同：同第3番⑦同：同第4番⑧平澤真希：天への回帰-龍  
平澤真希 (p)  
[ART INFINI] ©MECO1018]  
CD&SACD ¥2857

## 那須田務 ● Tsutomu Nasuda

**推薦** 今月の末永匡の『インテルメッツォ』のように、若手から中堅世代の音楽家の、個人的な世界観を反映したアルバムを見かけるようになった。これまで邦人音楽家というと、技術はあるが、個人的なものをあまり出さない（したがって個性の上でも控えめな）なイメージがあったのだが、優れた技術と洗練された音楽性を持ちながら、率直に自分自身を表現する人たちが増えたということは、本当に素晴らしい。このアルバム、選曲の面では最後の1曲を除いて特に変わったところがないのだが、最初の《夜想曲》第20番嬰ハ短調から引き込まれる。そこにピアニストの平澤真希そのものの世界が刻まれているように思えてならないのだ。それはアルバムを通して変わらない印象だった。平澤は東京音楽大学及びシヨパン音楽院（現シヨパン音楽大学）で学び、16年間ポーランドに在住。2010年からは日本での活動を増やしているという。もちろん、個人的な表現と言っても、様式を無視してすべて自分流に弾いてしまっているわけではない。本人の演奏に比してなんら遜色ない、紛れもないシヨパンなのだ。美しいタッチ、洗練されていると同時に焦点が絞れた純度の高い表現が素晴らしい。《夜想曲》の想いの籠もったフレージング。《バラード》ほどの曲もこの

上なく明快なイメージが示されている。平澤自身の《天への回帰-龍》は諏訪湖の伝説に着想を得た作品。透明な詩情とエモーショナルなダイナミズムの同居したすてきな曲だ。